曾祖父の戦争

沖縄県立開邦高等学校　二年
濱川　木綿

祖父の家の仏壇には、軍服姿の男の人の遺影がある。彼は私の曾祖父、演川猛である。祖父は生前、戦争の話はあまりしなかったが、彼の話はよくしていた。曾祖父が軍医であったことや、徳之島の海で敵の魚雷にやられて戦死したことなど、私は小さい頃からあの軍服姿の男の人を知っていた。けれど、私はどこかで彼のことを恐れていた。なぜなら、彼の凛とした表情から重々しい戦争の面影が感じられたからだ。

祖父が亡くなって半年。父が祖父の家から古い書物を持ってきた。警察部経済保安課に勤務していた曾祖父の叔父が書いたものだった。どうやらその本は戦後六十九年間大切に保管されていたらしく、昭和の臭いがした。すべて筆で手書きされていて、私の知らない曾祖父の姿が事細かに記されていた。

三度目の出征を目前にした彼は、家族に「今度出征したら戦死してくるつもりだ。だから、お前たちを見るのも今日が限りだ」と戦死の覚悟を伝えた。当事中学生だった祖父はその言葉の意味を理解したが、まだ幼かった弟は「そんなの嘘だ。今度行ったら、勲章も増えて大尉になるのでしょう。」と、これが父との最期の別れだということを理解していなかった。まして、赤ん坊だった妹ははたして父親の顔を覚えているのだろうか。

あの当事、このような家族がどれくらいあっただろう。望みもしていないのに、バラバラに引き離される家族。子供の成長を見守ることのできない親。親の顔を知らない子供。それが普通だった時代。

招集される前の晩。曾祖父は叔父の家で酒を飲みながら三線を弾いたり、遺言を伝えたりしていよいよ自分が戦死するかもしれない戦地へと向かう準備をした。手にして読んだ時、私は思わず涙が出そうになった。そこに、彼がいるように思えてきて、どうか行かないで、と叫びたくなった。

そして、彼は泣いた。死ぬかもしれないという不安を抱え、それでも戦地に向かわなければならない歯がゆさの中で、彼も、戦争によって希望を奪われた一人だった。私の中の彼への恐怖心が消えた。彼も一人の人間。家族を想い、死を恐れた一人の人間。あの凛とした表情の裏には、冷酷さではなく厳しい時代の中でも懸命に生きようとする彼のたくましさがあったのだ。

曾祖父が乗った船は鹿児島から沖縄へ帰る途中、徳之島沖合で魚雷三弾を受け沈没した。わずか三分十秒の出来事だったという。

曾祖父の遺骨は見つかっていない。お墓の遺骨入れに入っているのは、曽祖母が海岸で拾った貝殻である。彼は今なお、海底の奥深くで眠っているのだ。戦後六十九年が経った現在。私は疑問に思う。今は本当に「戦後」なのかと。私の曾祖父のように遺骨の見つかっていない人々は大勢いる。それに加え、毎年のように見つかる不発弾。いつまでも解決しない基地問題、米兵の暴行事件。半世紀以上が経った今も、あの戦争が残した傷跡は深く、私たちを苦しめ続ける。しかし、それらが当たり前のことだと思ってしまい、動けなくなっている自分もまた、怖い。

平和な沖縄を取り戻すためには、まず意識改革をしなければならない。そして私たち若者が率先して立ち上がり、間違っていることはきちんと間違っていると主張しなければならない。時代に流されてはいけない。政府に流されてはいけない。周囲の人に流されてはいけない。自分の手で努力しない限り、「平和」を築くことはできないから。

そして、私たちが抱えるもう一つの課題。それは、戦争体験者の高齢化である。去年、曾祖母と祖父が亡くなった。私の親戚で戦争

の話を自分の体験として語れる人はもういない。聞こうにも聞けない、それが現状である。

あの悲惨な戦争を絶対に繰り返さないために私たちには後世へと語り継ぐ責任がある。たとえ、戦争を経験していなくとも、先人たちの悔しさや悲しみ、怒りが私たちの中には脈々と受け継がれている。風化してはならないのだ。絶対に。

これから私たちは世界にも目を向けて「平和」を考えねばならない。今も地球上のどこかでは争いの為に苦しみ、涙を流しながら平和を叫び続けている人々が居る。同じ地球人として、その人々の声に耳を傾け、ともに平和を築いていくのだ。みなが手をつなぎ、笑い合える平和な世界を目指して。曾祖父に「これが私の生きる平和な世界です。」と自信を持って言えるように。